

---

# テンプレチート？夢のまた夢だよ

リョク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テンプレチート？夢のまた夢だよ

### 【Nコード】

N0299BA

### 【作者名】

リヨク

### 【あらすじ】

目覚めたらリリカルなのはの世界に？

明らかにチート転生者も居るし、こっちには用途不明のレアスキルに聖王の鎧にばれたら殺されるであろう（自分が）ユニゾンデバイスのアギト…………。

これは主人公がチート転生者のオリ主（笑）から逃げるお話である。

## 憑依先はクローン（前書き）

あけましておめでとございますー！！  
つーわけで新小説を！！

## 憑依先はクローン

何時も通り起きる、それが普通だった、だけど今日は体が重く、それで居て暖かった。体が何か温かい水に浸かっている様な感覚、いや実際に浸かっているのだろう。

重い目蓋を開けるとそこは研究所だった、本当にそれしか言えないのが辛い……。つかここ本当に何処？

「ゴボツ！？……ゴボ、ガボゴボ（ここツ！？……うえ、器官に入っただ）」

器官に入ったが大丈夫のようだ。

「ふむ、正常に作動しているな」

「魔力も高い、成功のようだ」

目の前の科学者？みたいなのが喋ってるんだがよく分からない。本当にここ何処？

六年後、あ？話が飛びすぎ？しょうがないよ、僕ですから。

まあそんな話は置いて……僕は魔法少女リリカルなのはの世界に居るらしい。え？分からないって？まあ簡単に言えば僕はこの体に憑依したらしい。

その体は古代ベルカの王族のクローン、聖王オリヴィエのクローンらしいです。性別はちゃんと男です、女になってたら自害しますコレ絶対。

まあ辛い訓練や実験は苦しいですが生きたいので何とか必死に生きています。

僕はヴィヴィオの成り代わりかと思ったんだけどここにはアギトも居たから絶対に違うって言う事だけは分かった。

そして僕はアギトのロードです、炎の魔力変換資質ですから使えます。

レアスキルは聖王の鎧以外にもあったりします、実質二つです。ですが使いこなせるかと聞かれたら使いこなせません、自動でも無い<sup>オート</sup>ですし時間も少しですがかかります、それにこれは魔力ではないですし。

研究院達の話聞いて分かったのですが原作組、もとい原作キャラ達とは一応同い年です、あくまでこの身体の身体年齢と同じなだけですが。それに原作には居ない人もいた。

オッドアイのイケメン野郎、それに無限の剣製《unlimit  
ed blade works》と言う名前のレアスキルが……。

どう見てもチート転生者です本当にハイ。

で、どうするか……。

「とり合えず脱走しよう、アギト」

「わかったぜマイロード」

このままじゃあ殺されるからね、明らかにハーレム狙いだし……  
アギトも狙ってるだろうし……。

フラグは知らないところで立つ

あれから二年、脱走は上手く言っただと言えは上手くいった。前々から考えていた事ではあったし計画は時間をかけて練った。事実逃げ出せたのだからそれは良かったのだろう。  
で、今は地球……なんで？

正解は地球の常識しか知らないから、お金についてもだ。

憑依前は純粋な日本人、それに何故か地球に惹かれる。

「よし！魚でも取るか！！」

「楽しみにしてるぜオウカ！！」

とり合えずバリアジャケットを着てモリを持つ、デバイスは単純な西洋剣だ。それを背中に携え海に飛び込む、春先の海水は肌を刺すように冷たかったがバリアジャケットがそれを守る。目にはゴーグルを付けていたので海水は目に入る事は無く呼吸はバリアジャケットがカバー出来ている。

「（今日は少し遠くまで行っ見て見るか）」

思えばあの時あんな事を思わなかったら良かったんだろう……  
…。

「よし、大量大量」

アミには大量ともいえる魚介類や貝類があつた、これだけあれば三日は事足りるだろう……。そして帰ろつかと思つたとき……。

「ん？何だあれ？」

海のそこに光る何かが有つた。

「もしかしたらお宝かもしれない」

実際にこの二年間はお宝を見つけることもあつた、少なかったとは言え質に入れ換金すれば大金にはなつた。言つてしまえば経験だ。

そう思いながら海に潜り、光る物の近くに行く。光るものの正体は

綺麗な日本刀だつた。

「（何だ、外れか）」



けど外れにしては綺麗な刀だ、むき出しのままなのに錆びてる様子が無い。むしろ新品のように光り輝いている。

「（まあ持つておいても損は無いだろ）」

そんな感じで触った。

その瞬間刀を中心に莫大な力の奔流が生まれる。

「ゴボゴボ！！！（やばっ……溺れる）」

急に海流が生まれその中に飲まれそうになる。

だが魔法を使い周囲を少しだけ蒸発させそのまま海面にでる。

「ぶは！！！」

すぐに体に溜まっていた二酸化炭素を全て排出し酸素を取り込む。

「ぜえ……はあ」

息をしながら何とか自分のペースを取り戻す、魚や貝はちゃんと持ってきた。ただ明らかに原因である刀も持つてきていた事には驚いた。

刀を手から離そうとしたが取れなかった。

仕方が無く腕を切り落とそうと早まったことをしようとデバイスの剣を背中から抜いた。このときの考えは頭に酸素が回っていなかった為である勘違いはしないで欲しい。

その時、手から刀が外れそのまま剣に吸い込まれる、剣は形を変え先ほどの刀に変わった。

「……一体どついう原理だよ」

そう言いながら僕は島に帰るのでした、マル。ちなみに今は無人島暮らし、ナレって怖いね。

酷い事？お前が言っな！！

「ケホケホ……………」

「大丈夫か？オウカ？」

あー、風邪引いた……………。原因は恐らく昨日の海流に飲まれた事が原因だろうな。あれから体中に変な力が渦巻いている、もう一つのレアスキルと同じ力だから恐らく体外に放出はできるだろう。

「……………今日は私が作るな」

「……………ああ、ありがと……………アギト」

ああ、平穏だ。研究所暮らしが長かったから今は平和が大好きだ、だけど何時までもここに居られるわけじゃない。

それに昨日の事もある、もしかしたらロストロギアの暴発とかになりそうだから……………。

アギトもこっちに居る、あの転生者からは命を狙われるかもしれない。

「そろそろ潮時かな」

寂しく呟いた言葉は誰にも聞かれる事無く、響いた。

「もう朝か……………」

風邪はもう治った、力も何とか安定したものになっている。そろそろこの拠点から離れないといけない。何時管理局が来てもおかしくない……………だから……………。

「…………… 本当にここで魔力が観測されたんですか？」

外から声が聞こえる…………… 同い年くらいの女の子の声だ、その声の主は……………。

茶髪のツインテールの少女だった。

他にも金髪ツインテールとかショートの子とか……………。

なのは、フェイト、はやての三人だった。

「最悪だな……………」

これが世に聞くご都合主義なら間違いなく神様を呪ってやる。

まああの銀髪オッドアイのチート野郎は居なかった、それだけが救いだろう。

「オウカ……………」

アギトの小さい体が震えているのが分かる、僕のこの体を作りアギトと一緒に実験していた組織は管理局だった。偶然見つけた資料で知ったんだ。

だからアギトは管理局を信じなくなった、本来はシグナムの相棒になる筈だった子……………。

僕はあくまで一割がそんな事をやってるだけに過ぎないと頭の中では理解している、頭の中だけけどね。

「大丈夫、逃げられるから」

アギトを心配させないように抱きしめる。

「でも、でも……………」

「大丈夫だから……………」

自分の体も震えているのが分かる。

「あそこに移動船がある、それに乗れば……………」

逃げられる、そう確信してもやはり怖い……………。

でも……………。

「逃げなくちゃ……………」

言う、言葉を紡ぐ………デバイスに名前は無かった、それを書き換えられ新しくなったこの刀の名前を言う。

「アマノムラクモ、set up」

虹色の魔力が体を包み込む、バリアジャケットが構成される。バリアジャケットは綺麗な赤い着物に白色の羽織、足はシンプルな靴、籠手もあり以外に丈夫そうだ。

「走って逃げる」

足から魔力を放出する、魔力は炎に変わり速度を上げる。

「おりゃあ!!!!」

洞窟から飛び出して海岸にあるもう一つの洞窟に置いてある次元移動船に乗れば良い。

いきなり飛び出したため三人に気づかれる、それでも逃げる。

「待つて!!!!」

高町なのはが僕を止めようと声をかける、だけど止まってたまるか

……!!

「待つてください!!!時空管理局です!!!話を」

今度はフェイト・T・ハラウンが目の前に立ちふさがる。

「い、嫌だ!!!!!!」

素直にはつきりとそう言う、そう言ったときのフェイトの顔が少し泣いていたが気にしない！

八神はやては遅い、つまりフェイトの隙を着いた今なら逃げられる。

「うーおーあー!!!」

「ぐふい！！？」

せ、背中があああああああ！！！！聖王の鎧があると言つても衝撃までは殺しきれないんだよ！！

誰！！？  
一体何！！？

「全く……手こずらせやがって」

背中に乗せるのは赤毛の三つ編み……守護騎士の一人ヴィー  
タだ。

何でここに……って回りをよく見ればあの転生者以外全員居るじゃない……アンビリバーボー！

「まあ待てヴィータ」

ヴィータに声をかけたのはシグナムさん、ゴメンあんたの未来の相棒は僕の相棒です。

「やっと止まったの」

「……うん」

「泣きやんでえなフエイトちゃん」

ああ、全員来てしまった……中には消えたはずのリインフォースも……。

「おい！てめえ！何でこんな所に居るんだ！！」

耳元でうるさい声出さないでくれ……病み上がりなんだから。

「待てヴィータ、流石にそんな口調では言えないだろう」

「そつだよヴィータちゃん」

「…………アギト、今なら」

『ああ…………』

「ねえ君、名前教え」「ユニゾン・イン」「てッ！！？」

名前なんか教えない、教えてあげない！僕の平穏を乱す者には教えてあげない！！

そう思いつつも一時的にぶっ飛ばせたのはあくまでほんの一時。

「あれはまさか融合騎！？」

「リインフォース以外のユニゾンデバイス…………」

リインフォースが驚き、はやても何か言っている。

「今のうちに逃げ…………」



「てやあああああああ！！！！」

ってまたかヴィータ！！？

「くそ！」

ガキン！！

刀を鞘から抜き振り下ろされた槌を防ぐ。

「まさかベルカの騎士だったなんてな」

「アハハハハ、アンタとその武器合ってないね、幼いって言うか」

「ッ！てめえ！！」

おお、こんなに簡単にきれた。  
だけど遅い…………。

「いや、アンタの体系じゃあそれを使いこなせないんだよ、幼すぎてね」

そう言つとヴィータの首を掴む、もちろん絞める。

「ぐー！！」

そして水月に膝蹴り、デバイスを放した一瞬を狙いデバイスに斬りかかる。

ザンッ！

デバイスを横に真つ二つにし、そのヴィータの首から手を外し腕で締め上げ刀で固定する押さえつける。

「ヴィータちゃ」

「動くな!!」

一括する、その一言で静かになる。

首に固定している刀でヴィータの肌を傷つけ「流血させる。

「全員解除しデバイスをこっちに投げろ」

「な、なんでこんな事をするの?」

なのはがそう言う。

「解除しろ、女」

だけど無視する、冷徹に……………。

「駄目だなのは!こいつの言う事を」

ゴキ

少し煩いので黙らせる、つっても首の骨を折ったわけではない。折れてないよね?

「ヴィータちゃん!!」

「黙れ」

なんか自分が悪役になってきたんだけど……。まあ良いよね。

「良いからとつとデバイスを解除して投げろ」

「……………」

全員が解除してデバイスをこっちに投げる。

僕はウィータを放り投げると相手のデバイスを海に向かって投げる。

「ユニゾン・アウト」

「おう！！逃げるぞ！！オウカ！！」

このまま逃げる、よし！！上手くいく！！

「……………なんでこんな酷い事を……………」

なのはが最後まで言っている。

……………そうだ！

「お前等がそれを言うか？」

ここまで言うっておけばもう僕達には関わらないだろ、原作キャラ以外の魔導師って大した事なさそうだし。

それに大した事無かった、恐らく転生者が弱くさせているんだと思う。

「もう二度と会わないことを願いな、今度は殺すから」

「何やってんだよ！！管理局の連中と話すなよ！！」

あ、ヤバイ。アギトが泣きそうになってる……………。

「ゴメンね、アギト、少し腹がたつたから」

「それならいいんだけどよ……………」

取り合えず僕達はこの場から放れて船に乗り込む。

「行き先はランダムで、もちろん虚数空間以外でね」

そう言つと動き出す船、目の前は光に満ちていた。

桃色の光に

「なんでさ」

そのまま船は大破し、海に放り出された。

遺跡とかに迷ったら敵とかと遭遇するよね、嘘？しないって？？

「ぷは……………はあはあ」

あの後漂流して何とか陸地？にたどり着いた……………。陸地と居つても海の中にある遺跡に入ったら空気がある程度だったんだが。まあ海に投げ出された時に追撃とかされたからな、主になのはに……………フェイトは必死に追いかけてきたからな、結界を破壊して海に潜つてやり過ごした。だけどまさか海にまで砲撃するとは……………恐ろしい。

なんという冷血さ……………。

「でも逃げ切れたんだね」

「ケホケホ……………、なんとかなあ」

アギトも無事だったし、これからのことを考えないと……………。それにしても……………。

「ここ何処だ？」

本当にここ何処だよ……………見た事も無い遺跡なんだけど……………もしかしてまだ発見されていない遺跡とか！！？それなら俺が第一発見者になって……………って駄目だ。僕戸籍持っていない。これなら不法滞在者になって罪に問われる……………そんな事はあつてはならない！！

「それはともかく……………」

見た事も無い遺跡、謎の場所……………コレほど心を躍らせる物はあるだろうか？否、無いであろう……………考古学者じゃなくても探検してみたいと言う気持ちがあるだろう。何が言いたいて？つまりは……………

「探してみるのも一興かな？」

子供心を制御できない訳ではない、これは知識欲だ。たぶん……………。それに何故かこういう場所は昔から惹かれる。

「よし！じゃあ探検しようか！！」

こうして始まった遺跡調査、中々楽しそうな始まりだった。

「ここってかなり古い遺跡だねえ」

それに見た事も無い物質で構成されているし……………それに良い匂いがする。

「でも良く見れば罨とか色々あるな」

「引っかかるなよ」

「分かってるって」

つかこんな分かりやすい物を含めても遺跡に罠があるってことくらい分かるだろうね、コレ世界の常識。

「まあアニメや漫画とかならここで罠にかかる人が居るけど……………」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「……………おい、オウカ」

「聞こえないよ、僕には聞こえない」

そう、僕には聞こえない……………。水樹奈々ボイスの少女の声なんか聞こえない！！

そう思いたいけど何故か何かが転がってくる音がするんだよね、うん……………こっちに近づいてくるような音がするね。

「アギト、逃げよう！！」

「おう！！」

こんな厄介事には関わらない方が良く、逃げた方が良くに決まっている。

「あ！そこに居たんだ！！」

って何故か真・ソニックフォームになっているフェイトが居た。  
真・ソニックフォームってSTSじゃなかったっけ？

「なぜだああああアアアアアア！！！」

僕はバリアジャケットを着てアギトとユニゾンし、フェイトに背中を向けて逃げ出す。フェイトはそんな僕を見て追いかけてくる、その後ろにはアニメとかによくある巨大な岩の塊が転がってきていた。

「ちょー！！こつちくんない！！明らかにアンタを狙っているから！！」

「私だって好きでこんな事をしてるわけじゃない！！」

「いや、あんたが畏を」

カチッ

何？今何押したこの子？

「あんた……まさ」

ビュン！！

最後まで言い切る前に矢が投擲されましたよ。  
つてあぶな！！

やっぱり原作キャラは疫病神だうん！！

「何で畏を押すのかなあ！！かなあ！！？」

「私だって好きで押しているわけじゃ……っつ……っつ……」



「泣いたって許しません！！コレ絶対！！」

本当に何で泣くんだよ！！僕の方が泣きたいよ！！

……………そういや

「ねえ、何であの岩に攻撃しないの？魔法なら……………」

「……………さっきから試してるんだけど無効化される」

「マジ？そっぴや僕も魔法を上手く使えないような」

ってそれかなりピンチじゃない！！

「どうにかならないの！！？」

「少しだけなら足止めは出来るけど……………」

「くそ……………それじゃあ駄目……………」

アレなら壊せるだろうけど今の状態じゃあ出す前に死ぬ……………って

……………もう行き止まり！！？

「嘘でしょ！！？」

ヤバイ！！だいぶ離れられたけどじきに潰される……………。

くそ！！

「くそつたれ！！」

壁を思いつきり殴る、それで壊せるのであれば苦労は無い……………。

ただ音が向こう側まで響くだけ……この壁の向こうに空間がある？

「こうなりゃ一か八かの賭けだ！！フェイト・T・ハラウン！少しでも良いからあれ足止めしろ！」

「え？う、うん」

フェイトが頷き、バルディッシュを転がってくる岩に向ける……。

「すう………はぁ」

落ち着け、アレを出すのには体中が痛くなる……。まあ今回は命の危険があるからしょうがないけど。

理念を捻じ曲げ概念を破戒し理想を夢見現実を逃避……あらゆる事象を再現し星を目に写す。

……眩暈がする……吐き気も今来た。  
なんでこんな厨二見たいな台詞を考えないといけないんだよ、ぶっちゃけ現実逃避だろ。

太陽に接近し……繋ぐ。

「ッー！ぐふ………」

やば、血が出てきた……。  
体の感覚が無くなっていく感じた……体の端から食いちぎられている感じ……何時まで経っても慣れない。

アクセス完了。

よし、来たきたあ！！

「ゴフ……………」

口から大量の血が流れ出る、それと同時に空間が歪み壁に火がつく。火は捻じ曲がり壁を破壊し吸収して大きくなる、それはそのまま向こう側まで開通した。

火はすぐに消える、元々そんなに長く出来ないからな……………。

「あ……………あがああああ！！！！！」

体中に激痛が走る、そりゃそうだよねえ……………体の肉片が無くなつていくんだから……………。

つてこのままじゃ僕潰される！！？

「危ない！！！」

フェイトが僕を掴んで走る、どうやら向こう側は階段になっていたようだ。

フェイトは階段を登る、岩は階段の途中で止まり、そのまま下に落ちる。

「た、……………助かった」

本当にギリギリだった、この時くらいは原作キャラに感謝くらいはしても良いだろう。つて

「元はと言えば僕の平穏な日々を壊した管理局の連中が悪いんじゃない

ねえか……………」

「……………何でそういう事を」

「お前等が悪い、ほら、アギトも怯えちゃって……………」

服の中で震えているアギトを抱きしめる。

フェイトはそれを見て少し心を痛くしたのか辛そうな顔になる。

「……………嫌いなんだね、管理局の事」

「嫌いじゃない、心のそこから関わりたくない、聞きたくない、滅んでしまえば良いと思う」

これは本心、ぶっちゃけ無くなってしまえば良いとすら思ってる。

「そんなに言わなくても……………」

「言うよ、いくらでも……………。百害あって一利なしじゃあ無いけど僕にとっては害の方しかない」

「……………」

「あの実験からやっと逃げられたんだ、クローンとしてじゃなく人としての幸せを得たいと思うのは当然じゃない？」

「ッ！！まさか……………プロジェクトF・A・T・E！！？」

フェイトが大声を上げる……………そりゃあねえ……………自分の出生に関する物だから見逃すはずがないよな。

でも僕にとつてはどうでも良いことなんだよ……………。

「つつても僕は昔の人間のクローンらしいから」

「……………貴方もスカリエッティの……………」

「スカリエッティのせいじゃないよ、あれもクローンだよ。それもアルハザードのね」

「ッ！！？でも、スカリエッティは罪を！！」

フェイトは叫ぶ、そうでもしないと自分が何を目的に行動してきた全てを否定されないからだ。

そんな事はしないし僕にそんな発言力は無い、こんなの戯言、いや……………戯言以下だ。

「それをアンタが言う？この世界を滅ぼしかけたのに」

「あ……………」

「八神はやての持つてる夜天の魔道書の守護騎士達もだ、管理局に入局したら罪が償えらとでも？甘ったれるなよ、そんなに罪が償えるのか？」

そう、二次小説とかではオリ主が守護騎士達は主に命令されてただけで仕方なく魔力を徴収していたとかで罪がなくなるのがあるけど……………被害者側から見ればそれは溜まったもんじゃない、はやてもはやてだ。

自分も罪を被るとか言っているけど犯したのは守護騎士なんだ。

世界はご都合主義で出来ていない、悔しいけどこれが現実なんだ。

「それに守護騎士は人間じゃない、人間じゃないのに人間の法律で裁くなんて可笑し過ぎる」

「そんな事無い！！シグナム達は……」

「悪いけどあなたの意見なんか聞いてない、私から言わせれば貴方も守護騎士達もちゃんと罪を清算してない、ずっと犯した時のままだ」

きつと自分の目は本当に酷く冷たいんだろう、本当はこんな事は言いたくない。

「でも一つだけ言っておくよ、生きている限りは罪を重ね続ける事もできるし清算する事もできる……それに死んだら罪がなくなるわけじゃない、むしろ死んでからが辛いんだ……本当に清算したいなら自分の思いで行動しな、生きているんだろ？」

「まあ、アンタは若いんだから地道に考えな。自分自身でね」

まあ、自分で考えた方が一番良いんだけどね。そう言いながら僕は立ち上がり上を目指す。

「マナさんのようにね」

まあこれは余計な事だったかもしれないけどね。

「で、到着つと」

「……………」

フェイトはすっかり喋らなくなった。

まあ言いすぎたのが悪いかもしれない、でもアレくらいなら反論の余地はある。

でも、反論した所で何かが変わるわけでもない、これは世界の法則なんだから。

それは反論する事が出来るけど変わらない不変。

「何考えてんだ僕は……………」

さっきから近づくにしたがい考えが変わっていく。

「……………さっきはゴメンね、少し言いすぎた……………」

「……………」

「でもさ、お前って子供でしょ。ならもう少し子供らしく振舞えば良いよ、そうすれば気がつかなかった物も見えるはずだからさ」

まあ自分の言葉は矛盾だらけだから、そんなに考えない方が良いよ。

「さて……………ようやく着いたわけだけど……………」

目の前にあるのは壁画？のような物だった。

山の上に剣と写輪眼の文様と太陽みたいな物を宙に浮かせている犬の様な物が画かれていた。

「何コレ？」

まあ変な物には変わらない、取り合えず写真。

「よし、上手く撮れた」

綺麗に撮れた、けどさっきからフェイトが下を俯きっぱなしだよ。少しくらい元気にしたほうが良いな。

「お前が今何考えているのか分からないけど、人間か人間じゃないかなんて些細な違いだよ。それともなに？お前は自分が人間じゃないとか思ってるの？」

「違う……」

「そうだな、クローンは人間だ。人と同じで人を愛せるし憎む事が出来る。それにアンタは綺麗だからさ、クローンだと知っても好きで居る奴の方が多いんじゃないか？まあそれで皆がお前の事を嫌いになっても僕は好きだぜ、時空管理局員としてのフェイトじゃなくフェイトと言う一人の存在が。話して楽しかったしね」



あの後何とか出られた……………まああの壁画の横に階段が合ったからそのまま上ってきた。

「うーん、空気が美味しい!!」

アギトは今寝ています、フェイトは未だ俯いています。

「……………じゃあね、もう二度と会わないと思うけど」

そう言つて立ち去ろうとした、その瞬間バルディッシュ鎌バージョ  
ンで首を押さえられている。

「な、何を」

「……………すみませんが貴方を時空管理局員として……………いえ、フェイトとして保護します」

あれ？ドウシテこうなった？

「な、何で？」

「貴方がさっき言った事です、時空管理局に捕まったら実験される  
かもしれないですよね？」

「う、多分そうなると思う」

この体は唯一の成功作品だし性能良いし……………。

「なら時空管理局としてじゃなく、フェイトとして貴方を保護しま

す。大丈夫、ちゃんと世話するから」

あれ？目おかしくくない？何ていうんだろっ……………要領オーバーでパ  
ンクしたと言うような感じだ……………。

「あの？お願いですから逃がしてください？」

「駄目です、私が貴方を守るから」

「ねえこれってスルーしてるよね！！僕の言葉を返してないよね！  
！？」

ヤバイ、本当にヤバイ……………。

どうにかしてこの場を離れな……………って、誰だあれ？

弓を構えてこちらを……………あの剣てたしか……………ッ！！？

「危ない！！」

**宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない（前書き）**

携帯電話？じゃあ書きづらかったです。  
そして一応転生者も出せました。

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない

俺は神崎大輝、所謂チート転生者だ。

貰った物はオッドアイで銀髪、ニコポ、高い魔力にエミヤの無限の剣製だ。だが最初は本当に酷かった、中身の無い空っぽの物しか作れなかったからな。

だが原作に関わってからはずっと宝具も投影できるようになった。プレシアは救えなかったけどリインフォースを救えたのは良かった。おかげさまで原作キャラにも好かれている。

P・T事件はなのはの味方だった、フェイト側をについた転生者も居たがあそこまで欲望垂れ流しだとは思わなかった……。

闇の書事件でも転生者はいた。

両方とも牢屋のなかだけだな。

そもそもクロノをKYと呼ぶのが理解できない。

まあ色々あったが俺はオリ主になった。

なのは達も俺に優しい、普通に話してくれるし一緒に遊んだりもしている。

だけどフェイトは違った、明らかに男を避けている明らかに他の転生者にクローンだと言われて脅されていた。フェイトをハーレムに加えたいけど今のままじゃ何もできない、幸いフェイトの中で

俺は信頼できる人間らしい。でも今のままじゃあなんの進展もない。どうにかならないかと思つてたが転機が現れた

明らかに原作じゃあ現れない事件が起こつたからだ。

まず間違いなく転生者だろう。

ただ俺はすぐに行けなかつたためなのは達に皆で行けと言つた。

だが逃げられた上相手がアギトを所有していることが分かつた。

俺は急いで地球に戻ることにした、間違いなくそいつもハーレム狙いだと分かつた。アギトを所有している時点で原作に接点を持つとして、いることが分かる。

そして地球に戻つた瞬間にサーチャーで見つけた、フェイトと知らない奴が一緒に居るのが分かる。

俺はカラドボルグを投影する、だけどこれじゃあ威力が高過ぎる……。

……。

そう思つた俺はカラドボルグを地面に突き刺し矢を投影する。

弓は無駄無しの弓だ、<sup>フェイル・ノート</sup>これなら威力も申し分なくなる。

そして弓を構え、放つた。

僕はフェイトを突き飛ばす、その際胸を触つた。柔らかかつた……

って違う！

あのオリ主が弓を構えている、地面にはねじ曲がって刺すことにしか使えないような剣、カラドボルグが刺さっている。  
フェイトが近くに居るからなのか射てないようだ。

「大輝！？なんでここに！」

フェイトは叫ぶ、どうやら予想外の事らしい。

「くっ！」

ガキンッ！

刀で射られた矢を弾く、力を使うがいなせないほどでもない。  
オリ主もどうやら今ので矢が効かないと判断したのか刺さっていたカラドボルグを持つ、どうやらフェイトが怪我するのを覚悟の上で使うつもりらしい。

後ろに居るフェイトの姿を見る、両手を地面につけふせている。

……どうやらフェイトは念話で説得したが断られたらし……。

つまり投降しても意味はないということ、まあ投降しても意味はなさそうだけど……。

「……アギト、起きろ」

指でアギトを小突く、アギトは少し声を唸らせ目を覚ます。

「ん、どうしたんだよオウカ……ってなんだよあれ？」

「分からない、まああの攻撃を防ぐから早くユニゾンして」

「つてあれを防ぐのかよ！はあくまあいいや、じゃ」

「「ユニゾン・イン」」

まああれを防ぐのはかなり難しいけど防げないわけじゃあない、劇場番の Fate ではキヤスターが一時的とはいえ防いでいるのが例だ。

それにこの距離なら……。

「アマノムラクモ、カートリッジロード」

ガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤン  
ヤンガシヤンガシヤンガシヤン！

「嘘！？カートリッジを十個も！！？」

フェイトが後ろで叫んでいるが気にしない、と言うより構うことが出来ない。

刀を鞘に納めて構える、狙いは一瞬……。

「駄目！逃げて！大輝のあれは本当に危ないから！」

フェイトが逃げても良い許可を出した、けど逃げる暇が無い。

それにカートリッジを十個も使ったんだ、今止めたら行き場を失った魔力は暴走して体を壊す。

「あー、無理」

一応フェイトに返事しておく。  
集中したまま返答を待つ。

「どうして…?」

「今逃げたらあんたが食らうだろ?」

「確かにそうだけど」

「僕嫌なんだよね、傷つくとしていながら逃げるのは、例え管理局でもね。まあこれは建前だけだね」

それに……。

「本当はこんな可愛い女の子を一度で良いから守ってみたいって感じかな?同じクローンとしてじゃなく一人の男としてね」

「ッ!?!」

さあて、ようやく準備完了だ。これにうち勝てなければ俺は捕まって実験漬けの毎日に逆戻り……。

勝てば。

チート野郎が剣を矢にする。

「蛇竜」

鞘から刀を少し抜く。

チート野郎の手が開き矢が放たれる!

「一突ッ!」



鞘から刀を抜き、接近してきたカラドボルグ目掛けて突くッ！

カラドボルグに蛇竜一突が直撃する。魔力を全て一点に集中させる。普通はカラドボルグなんかとぶつかり合えばこっちが折れる、實際この前のデバイスならば間違いなく折れてたと思う。

ただこの前の刀を取り込んで以来かなり強固になって切れ味も上がっている。

何かのロストロギアかは分からないけど宝具と打ち合える代物になっているらしい。

それに少しだけ角度をずらしている為真っ向からぶつかり合うわけじゃない。

それにアギトの魔力に聖王の鎧が体を保護してくれる。だけど相殺するには時間がかかる、その間に第二撃が来る。その前にカラドボルグを破壊する必要がある。

その為にも、もう1つのレアスキルを使うしかない。

「……アクセス開始」

体に走る激痛、肉何かにつまんでは千切られるような痛みが走りる。

「ッ！……アクセス完了！」

その言葉の後に炎が走る、その炎はカラドボルグを包み込み破壊する。視界は炎に吞み込まれ見えなくなった。

「ぜえ………転移魔法………」

自分が立っている場所に魔方陣が現れる、少し時間がかかるとは言え確実に逃げられる手だ。

「………ま、待って！」

そう言っ僕の手を掴むフェイト………。

なんで掴むの！！？って言いたいけどレアスキルの影響で今はしゃべれない。

そして炎が晴れるとチート野郎が紅い槍を弓で射ろうとしていた。

紅い槍と言ってもゲイ・ボルクかどうかすらも分からない、流石に視力にも異常が来ていたのかよく見えない。

けど何故か分かった、あの槍かが非殺傷設定ではなく、殺傷設定でしかもそれがフェイトに当たると言う事が………。

それが分かった瞬間僕はフェイトをだきよせる。

「な、何を」

ザシュツ！

「する………の？」

紅い槍はゲイ・ボルクじゃなく、ゲイ・ジャルグの方だった。

「　　ツ！！！！」

ゲイ・ジャルグは右肩を容赦なく貫く。

肩に走るのは貫かれた痛み。

体が少しでも動いたのが幸いだったのか、左手でゲイ・ジャルグを掴み捨てる。ゲイ・ジャルグはその直後に爆発する。

そして右肩から溢れる血液を止めることなく、転移した。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない（前書き）

旅行は楽しかったです！

ただ外が吹雪いていたけど…………。

そしてベッドで寝ていたら落ちたらしいです。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない

「く、ツツ〜！」

「動くなよ、包帯を上手く巻けないじゃねえか……」

場所は林、チート野郎から逃げてきて十分、僕は普通の人体型になったアギトとフェイトに貫かれた右肩に包帯を巻いてもらっている。血はアギトに治癒魔法を使ってもらい止血した、アギト自身は治癒魔法が苦手らしけどこの体は治りが早い為すぐに治った。だけど右腕を動かすには後三日くらい時間がかかる。

その為にもホテルを借りないといけないのだが……。

「ねえ、フェイト……さん」

「フェイトで良いよ」

「じゃあフェイト、二つ聞きたいんだけど」

「何？言える事なら話せるけど」

「僕を殺傷設定で攻撃した人の印象を教えて欲しいんだ、フェイトを含めた全員のね」

そう、これが聞きたい。

チート転生者の殆どは原作キャラから好意を寄せられる。

全員から好意を寄せられるのが多いけどもしかしたらあまり快く思っていない奴も居る筈……。

そいつを味方につけられたら……、まああくまでも最後の手段としてだが。

「なのはとはやて達は多分、ううん…間違いなく好意を持ってる」

予想は出来てたけど女性陣は敵か……。

だけど男性なら

「ユーノやクロノ義兄さんにザフィーラも信頼できる最高の友人って言ってた」

駄目か……、これは予想外だったな。

ユーノを淫獣、クロノをKYとか言って毛嫌いしてるかと思ってたけど……。

さっきの事もあるけどフェイトも……。

「私とアルフ、まあ私の使い魔なんだけど……あまり信用してない……」

それは以外だった、まさかフェイトがあまり信用してないとはね、アルフはそうでもないけど。

「へえ、どうして？」

「……昔私が関わった事件、まあ私のお母さんが起こした事件なんだけど」

つまりP・S事件の最中、もしくはその前後か……。

「続けて」

「うん、私が来たばかりの頃にアルフと一緒に町を歩いていたんだ」

「それで？」

「……アルフが血の臭いがするからってその場所に行ってみたら」

あ、成る程……分かった。

「人を殺していたと」

「うん……」

で、それを言おうにしても証拠が無い。それに信用されている男が殺人等と言うふざけた事をする筈が無い、と言われるだけだ。

「まあそれじゃあ信用するなんて無理だわな」

そりゃあ無理に決まってるだろう、殺人を犯した相手を信用しろと言う方がヤバイ。

一般人がアニメや漫画を見て共感するのは違い、実際に起きた事件で私利私欲の為に殺したとなれば信頼なんて失せるに決まっている。

「はあ……………、かなりヤバイな……………」

このままじゃあ本格的にやばいからな。

「……………ねえ、時空管理局に捕まればなんだよね……………」

「？まあそうだな」

どうしたんだ？フェイト……………。

「ならさ」

僕はその後フェイトが言った言葉に度肝を抜かれた。

「……………確かに、それなら……………でも……………僕も危険だしフェイトも巻き込むことになる」

「うっん、私達が貴方の事を……………それに殺傷設定で放った事もあるから……………」

ああ、しょうがない……………今はフェイトの言う事を聞こう。

「アギト、嫌かもしれないけどフェイトの言うとおりにしよう……………」

「私はロードの言う事に従うだけだ！それにこの金髪は信用できる……………」

「どうやらアギトに気に入られたようだね」



アギトが管理局の人間なのに懐くなんて珍しい、でもフェイトは信賴できる。

だからなのかフェイトと一緒にいても嫌な感じはしなくなった。

「……そういえば何で私達の名前を知ってたの？なのはには女つて」

「ああ、アレは脅しやすくする為に言っただけ………名前は研究所で」

本当にこういう時だけは便利な研究所、その名前を出すだけでフェイトは少し辛そうな顔をする。

まあ本当は前世のテレビで………そういや何時見てたんだっけ？まあコレだけ長い時間が経っていれば忘れるよな。

「じゃあ………これからよろしく、フェイト」

「うん、よろしくねオウカ」

「フェイトちゃん……大丈夫かなあ？」

なのはが心配している、だが大丈夫だ…… フェイトはあの野郎に放ったカラドボルグの衝撃でぶっ飛んだ筈だ。

最後に放ったゲイ・ジャルグ以外は非殺傷設定で放った、アイツの死体が発見できなかったが直撃した証拠に地面には血があったからな。

「たぶんな、アイツが非道な事をしていなかったら大丈夫だ。それにフェイト程強ければ戦いだって持ち込めるはずだ、その時に魔力を感知できれば」

「うん……そうだよな」

どうやらその転生者はかなり酷い奴らしい、ヴィータを迷い無く気絶させ人質にした。

それにそんなに酷い奴にフェイトは惚れない筈だ、ハーレムを狙って地球に来たんだろうが惚れるわけ無い、馬鹿な奴だ。

「なのはちゃん、大輝君！！フェイトちゃんからの通信が来たで！！」

お、はやてが来た。

それにフェイトからの通信も…… どうやらアイツと一緒に居ないようだ。

「だけどな……暫く戻れそうにないようや」

「はっ？」

俺ははやての口から放たれた言葉に度肝を抜かれる事になる。

「ふう、これでよし」

「でも本当に良いの？フェイトまで巻き込む事になるけど」

「良いよ、それにあくまでも私の言うことに従っていれば大丈夫だから……」

フェイトが出した条件、それはフェイトの近くに居る事。

そしてあのチート野郎が殺人、もしくは殺人未遂の証拠を掴む為に協力すると言う事、アイツが僕の肩を殺傷設定で攻撃したという事だけではまだ無理らしい。と言うより証拠が上手く取れなかったらしい。

そして僕を使って証拠を掴むと……、つまり僕は魚釣りの餌ですね分かります。

でもフェイトに協力する代わりに僕とアギトは事実上管理局の預かり扱いになっている。

フェイトの近くに居ないと駄目になるが管理局員が来てもフェイト

に守ってもらえる、まあ持ちつ持たれつの関係になると言う事だ。  
だが所詮形だけ……、あのチート転生者が何か言えば原作組みは  
僕を襲うだろう。

「でもその服じゃあ……………」

「…あー、確かに」

今の服は言ってしまうばかりボロイ、基本魔力を頼っていたし一  
人暮らしたったからこの服しかない。

「……………取り合えず服を……………」

「お金ならあるけどね」

そう言って札束を出す、換金していない宝石なども含めればかなり  
の額にはなる筈。

「……………お金持ち?」

「まあ一応富豪並にはあるけど……………」

「……………取り合えず行こう」

そのままフェイトに連れて行かれ服を四着ほど買った、安い服にし  
たかったが結構高い服になった。

そして何故かフェイトの服も……………ぶっちゃければフェイトの服の方  
が……………、一応人間サイズのアギト用の服も買った。

「じゃあ次はご飯にしよう」

「……まあ出費がでかったのはしょうがないよな」

僕の服の出費だったわけだし、フェイトとアギトは女の子だ。服は多い方が良さだろう。

ともかく、ようやくご飯だ。

既に日は暮れ始めているし……、長く居すぎると警察が職務質問とかしてきそうだからね。そう思いながら歩き始める。

「そこのお嬢さんたち」

現実で変なおじさんに話しかけられたら逃げろ、相手にとって男も女も関係ない

S t S 編をやるうか迷ってます…

現実で変なおじさんに話しかけられたら逃げろ、相手にとって男も女も関係ない

「そこのお嬢さんたち」

いきなり僕達は変なおじさんに話しかけられた。

初老の男性できつちりとした正装、白髪で威風がある髭等が只者ではない雰囲気を出していた。  
だけど攻撃的ではない。

「何ですか？」

「占いをやっていかんか？今なら口八でやっとするぞ」

「やります」

口八、つまり無料、只だ。

やっておいて損は無い、占いつて言うのは所詮英気を養う為に行う物だ。

それに良い気分になる。

「全く……」

「と言いつつも乗り気だねフェイト」

アギトも面白がっている、女の子好きだからね。こついの……  
……。フェイトとアギトも立派な女の子だったって言う事か……。関

心関心。

……そう思っていたら二人から蹴られた、何か失礼な事を考えたとかいってた……なんで分かった？

「ホホホ、元気が良いのお。どれ、手を出してみんしゃい」

なるほど手相占いか………信憑性なんて全く無いけど一番知られて  
いるメジャーな占いか……。

そう思つてるとフェイトが手を出した、初老の男性はそれを手に取  
り……

「ホッホッホ、若い娘の肌は良いのお」

「真面目にやれ!!」

このおっさん本当に占い師か？もう変態しか浮かばねえよ。

「スマンスマン、本当はこっちのが占いに使うモンじゃ」

そう言つておっさんは皿を出し水を入れる、そして何かが入ってい  
る袋を出す。

「これを皿の中に入れてみれ、これが占いじゃ」

聞いた事も見た事も無い占いだつた、いや………探せばあるかもしれ  
ないがこんな占いは憑依前でも見たことが無い。

「こんなのが？」



「まあそう言う占いじゃ……………」

このおっさん変だ、でも悪意は無い……………まるで子を見守る親のような感じだ。

そう思っていたらフェイトが袋から丸い物を取り一つ入れる……………水の色が変わり始める、色は青。

「ほお……………青か……………」

「……………これって色を占うんですよね？青はどんな意味を……………」

フェイトが真剣に聞く、本当に女子って占いが好きだなあ……………。

「これこれ、急かすんじゃない……………お嬢ちゃんは過去、未来、現在……………どれが良い？」

おっさんがフェイトに質問する、でもなんでその三択なんだ……………。

「私は未来です」

「その理由は？」

「私には一緒に居て楽しい友達がいま、その人たちと一緒に未来を歩みたいからです」

「そうかそうか……………」

おっさんはフェイトの答えを聞いて頷いている。

「じゃあ占いの結果じゃ…………お嬢ちゃんには死んでしまった姉のような人がおるのお」

「え!？」

このおっさんはフェイトに姉に近い人がいるのを断言した。  
何故かは分からないけどこのおっさんが少しだけ怖くなった。

「何で…………その事を」

「その様子からするとあたりのようじゃな」

「…………はい」

「その死んでしまった姉はいつでもお主の事を見守っている、と言  
っておるのお」

「……………そうですか」

「幸せになって欲しいとも言っておる、私の分まで幸せになつてと  
な」

「……………」

フェイトの目からは涙が零れ落ちていた。  
そして確信した、このおっさんが占い師ではない事に…………。

「おっさん、シャーマン？」

「昔はな、色々と見えるんじゃ、近い未来とかものお」

なるほど、だからか………占いではなく予知。

「まあ絶対ではないがのお、千回に一回は外れるからのお」

そして高確率で成功する事が分かった。

「それでさっきの続きでのお、フェイトよ………自身を持って、たまには素直になってと言っておる」

「はい………はい………」

フェイトが泣く、両の手で顔を抑えながら………泣く。

「次は小さなお嬢ちゃんじゃ」

「おう!!」

そう言つてアギトは袋から取り出し一つ入れる、色は赤。

「赤か、お主はどれが良い？」

「あたしは過去だ！色々と辛かったけどオウカと一緒にだったからな!!」

「ほお、お主はオウカが大好きなんじゃな」

「ああ!!」

アギトが嬉しい事を言ってくれる、本当に嬉しい。

こんな僕を好きと言ってくれるのもアギトくらいだろう。

それにしてもフェイトは泣き止まないな……。

「なあ、フェイト……胸くらいは貸すけど」

「……………ありがとう……………」

そう言つてフェイトは僕の胸に顔をつける、そして泣く。

色々と溜まっていたのか？原作じゃあ闇の書に取り込まれた時に解決したはずなんだけど……………。

もしかしてあの野郎が邪魔したとか？全くいらぬ事を……………。

「良い雰囲気じゃが、次はお主の番だぞ」

「あ、ああ」

何時の間にかアギトのは終っていたらしい。

アギトの顔を見ると僕の服を掴んでいる、何を言われたんだ？

そう思いながらも袋から取り出し、水に入れる。

色は変わらず透明のままだった。

「ふむ、なるほどのお……………お主はどれじゃ？」

「僕は……………現在かな」

「何故じゃ？」

「……………僕は未来はすぐにやってくるし過去も永久に来る、なら現在<sup>いま</sup>

は一瞬しかない……だからです」

「そうか……」

おっさんはそのまま優しそうな顔でこっちを見る。

だけど口は何かを嚙んでいる、言うべきか言わないべきか……。ただど何かを決心したのか口を開く。

「お主はいずれ自分の矛盾を見つける、そしてその矛盾が無くなった時……お主は全てを知る」

おっさんの言葉の意味が分からなかった、けど将来何かがあると言う事だけは分かった。

「……………それだけ？」

「いや、むしろ……お前さん、何か写真のような物を持ってないかい？」

写真？そついやこの前撮ったっけ？

「あるけど……」

「それを見せてみい」

言われるがままに出して見せる。

「…………この写真の場所以外にもこれと同じ物が後三つある、そこに行くといい」

「その場所って？」

この場所以外にも同じ物が？気になるから行って見たいと思う……  
…それに何故か知らないけど惹かれる。

「滋賀県にある琵琶湖、北海道にある洞爺湖、そして最後に行く富士山じゃ」

「なるほど……」

確かに言ってみる価値はありそうだね。

「でもなんで富士山が最後？」

「そこに三つのある物を持って行く必要があるからじゃ、詳しくは分かんが夜明けじゃないと意味が無いらしい」

何かあるのか？でもまあ行ってみる価値はありそうだな……。

「そうか……じゃあ行ってみるよ」

「ホッホッホ、気をつけてなあ」

取り合えず行く前に食事を取らないと……。

そう言って二人と一緒に連れて行く……そうだ……

「おっさんも一緒に」

後ろを振り向いた時、既におっさんは居なかった。



## 女の会話（前書き）

今回も厨二にご都合主義……………。  
できれば主人公を不幸にしたい！

次回は外伝やります。



## 女の会話

「……………なんだっただんだあのおっさん」

あの後探したけど結局見つからなかった、でも何で急に消えたんだろつか……………？

転移魔法は……………違う、それにあれば時間がかかる。レアスキル……………多分それだと思う。魔力は多分無かったと思う。

まあいいか……………、不思議なおっさんだったけど悪い感じはしなかったし……………。

「それよりも……………」

ぐぐ、と腹の音が鳴る。そう言えば今日は朝しか食ってない……………。

「何を食べようか……………」

出来れば魚料理じゃないものを食べたい、肉とか野菜とか……………。ぶっちゃけ中華を食べたい、だけどここはレディファーストという事でフェイトに食べるお店を選ぶ権利を譲ろうと思う。

「ねえフェイト、何が食べたい？」

「私はいいいよ、オウ力が選びなよ」

「いや、ここはフェイトが……」

「いや、ここはオウカが……」

お互いに譲り合う、でもフェイトが良いと言ったから選ばうかな。

「なあオウカ、フェイト!!」

そう思っていたらアギトが僕の服の裾を引っ張って声を上げている。

「どうしたのアギト」

「私あれが食べたい!!」

そう言つてアギトが指差すのは日本の文化、そして外国にも知れ渡る由緒正しいジャパニーズフード寿司。

どうやら僕は今日も魚料理以外を食べられないようです、くそ……  
こうなりややけ食いだ!!

そう心の中で呟きながらお店に入った、お店の中は一般的な回転寿司。

行列は無かったが混んでいた為十分くらい時間がかかるらしい、席が空くまで椅子に座る事になる。

その間にフェイトと少し話をしよう。

「そついやフェイトってかなり綺麗だね、それに可愛いし」

「……………か、可愛い？」

少しだけ、顔を赤くした。

まあ素直に褒めているからね、僕は鈍感でもないしそれ位の事は分

かる。

「きつともてるんだろうね」

「……大変だよ、もてるのって」

フェイトが何か色々と諦めたような顔をする……。

「な、何があつたの？」

「変にイケメンな人とか女顔の人に毎日のように『俺の物にならないか？』とか言ってくるし……しかも凄い大声で『嫁キター！』とか言うんだよ、街中で」

「うわぁ……………」

そりゃぁ酷い……というより現実に居たんだな、そんな痛い奴………。

「嫁キター！！」

……………実際に居た、そして今僕の目の前で起きたよ。今明らかにこっちを見て変な大声をあげる物凄い残念なイケメンの男がこっちに近づいてくる。

フェイトの顔が青ざめている、アギトもなんか汚物を見るような目でその男を見ている。

周りのお客さんも何事かと男を見ている、男は顔を赤らめてこっちに、正確にはフェイトを見ている。

「本当に居たんだね、半信半疑だったけど……………」

「……うん」

フェイトが嫌そうな顔をしている、と言っよりは変な物を見る目で  
見ている。

「フェイト、あれ殴って良い？」

フェイトが可哀想になったから、本心は目障りだから殴りたい。  
そして視界に二度と入れたくない。

「……………」

無言のままだ、それだけ嫌なんだろう。

そう思い立ち上がりその男の前に立つ、僕より頭一つ大きい男はフ  
ェイトに近寄ろうとするが僕が遮る。

「おい、邪魔ッ！！？」

最後まで言わせることなく水月に拳を入れる、男は腹を押さえなが  
ら僕の肩を掴む。

力も全く無い、鍛えてなかったんだろう。

「て、てめえ……………！」

「うるさい」

次は金的。

「あひい！！？」

「もう眠れ」

そして最後に顎にアッパーを決める。  
男はそのまま倒れる。

僕はその男の足を掴み外に出て辺りを見回す。  
そしてある人を見つけその人の所に行く。

「あの〜、すみません」

「あらあ〜？何かしらボクウ〜」

服の色がくどく女物で、不自然な金色の長髪に化粧しているが目立つ顎鬚の男性。

つまりオカマに話しかけた。

「この人が貴方に惚れたとか言っていたので」

「アラア〜！！嬉しいわねえ〜」

「それで目が覚めたら貴方と言えない事をしたと言っていましたが、目が覚めたらで良いですが」

「本当なのお〜！」

「ええ、ですから預かってください！」

「分かったわ〜、貴方もど〜う？」

「僕は遠慮しておきますよ」

そう言って立ち去り、すし屋に戻る。

そして何事も無かったかのようにフェイトの隣に座る。

「……大丈夫だった？」

「うん、ああ言うのを制御できそうな人に渡してきたから」

「な！誰だアンタ！！？」

『あら、照れちゃって可愛いわねえ』

『よ、よせ！！やめろ、やめろおおおおお！！！！』

ン

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア  
――！――！！』

外からさっきの男の声とオカマの絶叫が響いた。

「……大丈夫だから」

「絶対に大丈夫じゃないと思う」

フェイトは優しいなあ、アンナ奴を心配するなんて……。つかお店の中で大声あげる？普通。っとそうだそうだ。

「フェイト、これさっきの奴が持ってた物」

そう言つて一つの石を渡す、その石は綺麗に光る石だった。

「ッー！これってデバ」

「じー………」

「ごほん……デバイスだ………なんで持ってたんだろう」

「分からないけどフェイトに渡した方が良いと思って持ってきておいた」

「うん………だけどもんで管理外世界にデバイスが………」

それは恐らく転生者だからです、すみません。

同じ転生者として恥ずかしい………、一歩間違えば僕もあんな風に………。

「まあ良いけどさ、席空いたみたいだよ」

「あ、うん」

そう言つてフェイトとやアギトと一緒に立ち上がる。

場所はカウンターで三席空いている、そしてその席に座る。順番は右からアギト、僕、フェイトだ。

そして会話をしながら寿司を取って食べていく、焼き魚や刺身とは違った美味しさを楽しめた。

そのまま時間をかけたらいらげ、そのままお金を置き店を出る。

その時に白目を向いていたさっきの男がオカマに何処かに連れて行かれていたけど無視した、もちろんフェイトやアギトには見せないようにした。あれは刺激が強すぎる。

「で、寝る場所何処にする？旅館？ホテル？野宿？」

「何で野宿も……………」

「まあこれは最後の手段だから気にしなくて良いよ」

「……………じゃあホテルで」

「了解、でもどうするの？男と女じゃあ同じ部屋を借りるのはちょっと……………」

流石にホテルの部屋を子供が二つ借りるのはちょっと気が引ける。まあ僕は野宿でも構わないけど。

「うっん、部屋は一緒に借りるよ」

は？

「何で？僕男だよ、女顔でも男だよ。それに体格だって良いし……………」

「オウカがそんなことしない人だって信じてるから」

いや、僕は貴方が思うほど綺麗な人間じゃありません。

「だからって……………」



「それにアギトも居るし」

「大丈夫だぜ！オウ力は信頼できるからな！！」

「いやでも……………男と女とか……………」

「じゃあ行こう」

「話を聞いて」

結局僕の話は聞かれることなくそのままホテルで一緒に部屋で泊まる事になった。

「全く、こんなのじゃあご都合主義だ」

お風呂に響くのは声……………。

ビジネスホテルにある風呂を使っている、お湯の温かさが体に染み渡る。

「……………髪長いな……………」

何年も切っていなかったらこうなるか……………、短くしよう……………前世のように、って前世はどんな髪形してたんだっけ。

まあ何年もたてば忘れるよね普通。

『……で、何で一緒のホテルにしたんだ？』

外からアギトの声が小さいが聞こえる。

少し静かにして聞く、アギトはあんな姿をして子供っぽいがこの体よりも長く生きている。

もしかしたらフェイトよりも年上かもしれない。

『……なんていうのかな？この人はそんな事しないと思ったんだ』

信頼してくれるのは本当に嬉しいけど僕は貴方が思うほど優しい人間じゃない。

『でもさあ、オウカが言ってたけど男と女だよ、それに性格少し変だし』

否定はしないけどアギトが裏で僕の事をどう思っているのか分かった、否定はしないけど。

『まあ確かに性格変だし容赦ないけど………』

酷い！！出会ってから一日も経ってないのにそんな評価をするなんて！！

『……嫌な感じがしなかったんだ』

『嫌な感じ？』

『うん、さっきの男の人が良い例だけど………大輝が殺人をした所を見た後に逃げ出したんだよね』

今フェイトの昔話を聞いている、と言うより何でこんな重い話に？

『その後魔導師に会ったんだよね、何人ものね。その全てが協力してやるとか言ってる……嫌な感じがしたんだよね……私を物のように見ているとか……そんな目で』

また転生者が……っか馬鹿ばっかだなおい……。

『しかも全員が戦いだして……アルフと一緒に逃げて……なのはと会ったんだ、その時も大輝と会って分かったんだ、酷い目をしてるって』

『そうか……』

『それで大輝とだけは距離をとってるんだよね、だけどたまにカッコいいなと思うっちゃう時がある……』

大輝はニコポ、もしくはナデポを持っている。

だけどフェイトはそれを自分の思いだけで跳ね除けてるんだ。

ニコポやナデポは誰だろうと惚れさせる能力だと思っっているけどそれは違う、主人公に憎しみを持ったまま死ぬ敵キャラも居るように心で決まる。

言ってしまうえば心の持ちようでは耐えられる、だけど大半が気付くことなく墮とされる。

フェイトはそれにも自覚ながらも気付き耐えている、凄いと思う。

『だけどね、その度に思うんだ……なんで人を殺したのって……』

『そうか…………』

好意を持っていたても失望する、フェイトが堕ちないわけだ。

『それに自分が自分じゃなくなる感じが嫌だった、そして許せなかった……………なのは達には表面だけよく見せて隠れて酷い事をしていく大輝が…………』

どれだけ表側を良くしたって所詮は偽りの物だ……………いつか剥がれ落ちる。

たとえ酷くても本性を出しておけば良かったんだ、あの野郎の力なら不条理を変えることも出来る能力がある、フェイトも裏切ることは無かったのに。

『まあその点オウカは隠すのが下手だしな、すぐに顔に出るし』

え、そんなにでてたの？僕って…………。

『うん、ユーノや義兄さんのように嫌な感じはしなかったからね』

いや、だから僕は…………

『それに一緒に話していて楽しかった、言葉は色々矛盾してたけどね』

『そうだな、ハハハ』

「僕って……………僕って……………」

僕は周りの人からヘタレとでも思われているのかなあ……………。



**P V 五万達成 小学校（前書き）**

本当は三万の予定でした。

でも書いてる途中に……そして短いし意味不明です。  
それでも良かったら見てやってください。

P V 五万達成 小学校

あー、暇だ…………。

僕こと高町オウカは転生者だ、正確には憑依者が合ってるけど。

一応リリカルなのはの世界、僕のほかに転生者は居るけど…………

全員チート能力もちなんだよね…………。

高町の姓を名乗っているけど実は養子、理由は実験が嫌になって逃げ出したらフェイトに助けてもらったこと。

本当はハラウン姓になる筈だったんだけど高町親子に引き取られた、なのはが弟欲しいと言っていたからとか…………。

僕って弟？

まあチート転生者でオリ主である神崎大輝には絶賛睨まれています。ヤバイです、朝っぱらから僕の胃袋が破れそうです。そうになったら胃液が肉にかかって痛そうだなあ…………。

そんなこと考えてたらフェイトが近寄ってきた。

「お早う、オウカ！」

「お早う、フェイト」

フェイトが笑顔で僕に挨拶する、僕もフェイトに挨拶する。  
にしても本当に可愛い笑顔だなあ…………。

「席に着いて下さい、HRを始めますよ」

先生の号令で生徒が席に座る。

こうして、今日も一日の生活が始まる。

「俺と戦え！高町オウカ！！」

あれ？どうしてこうなった？

今は体育の時間、何をしていると思います？

ドッジボールです、はい。それでフェイトに応援されました。

あ、理由分かった。

「えー！！嫌だあ！！」

まあここは子供っぽく……。

「どうせ僕が勝つもん」

「……大輝、お前に味方しよう」「……」

あれ？何で？手っ取り早く済まそうと思ったのに……



「いや、今の言葉が原因だからね」

あ、また口が滑ったのか…………。

はあ、面倒くさい…………海に潜りたい…………。

「それじゃあ試合開始!」

ああ、先生!! お願いですから試合だけは!!

「はあ……………なんでだろうね……………」

「くそ……………くそ!!」

向こうのチームが僕にしか狙わなかった為こっちのチームの被害は少ない、それに対し大輝のチームは大輝一人しか残ってない。

向こうは転生者と言えど体はただの人間、でもこちらはクローン…………

…しかも生まれる前から強化されている。

やっぱり基本性能の差って大きいよね、戦い方以前に。

「じゃあこれでお仕舞い」

そう言って投げる…………。

これでやっと終われる。

トレース・オン  
「同調開始」

はっ？今何言いやがった？

しかもキャッチ……………、あんにやろっ……………チート能力使いやがったな……………。

「はっ！勝負はまだこれからだぜ！！」

そう言ってあの馬鹿がボールを投げる、それをかわす。

ゴッ！！

「うっ……………」

後ろの少年がぶっ飛ばされる、ちょっと待て……………ボールにも強化してんの！！？

「おい……………」

「お前には勝つ、それだけだ」

本当にこいつオリ主？

なのは達も少し驚いているぞ……………。

「がんばって！！オウカ！！」

フェイトが僕を応援してくれるのは嬉しいけど……………。

「まあ勝ちに行くか……………」

少し卑怯だけど。

「来い、次お前が投げた時が……最後だ」

かっこつけてるな……。

「まあ良いか」

そう言ってボールを投げる、ボールはさっき投げた速さより少し遅い。

「馬鹿か？何で少し遅く……」

そしてボールは大輝の手に収まる……瞬間に落花した。

「なっ！？」

落花したボールはそのまま大輝の足にぶつかり地面に落ちる。少しの間周りが静かになるがすぐに歓声になる。

「すげー！！チェンジアップじゃねえか今の！！」

「俺達の勝利だぜ！！」

「あの大輝に勝ったんだ！！」

周りが喜んでるけど、向こうは……。

「やっぱり大輝じゃだめだよなあ」

「性格やルックスは勝ってるのになあ」

「なんでフェイトさんはあんな奴に」

「くそ！！何で負けたんだ！！」

結局こうなると……………、なんか勝った気がしない。

「はあー……………今日もめんどくさかった」

「そう言わないでよ」

放課後になって掃除しフェイトと一緒に帰る、何も変哲の無い日々。

「フェイトも俺より大輝の方が良いんじゃない？」

ふいにこんな事を言ってみた。

「……………大輝は何か変」

「何か言った？」

「何も言って無いよ」

「……………なんだ夢か」

目が覚めるといつもの岩肌が見えた。

「もしも僕が原作キャラに会っていたら……………まああくまで可能性か」

それよりも先に殺されてたと思う。

「おーい！！起きたかオウカ！！」

「うん、起きたよ」

そうだ、あんなのは夢だ。

僕が原作キャラに会えるわけ無い、会おうとしても殺されるだろうが……………。

まあ向こうから来ない限りは……。

それから数日後、僕は原作キャラと転生者に会うことになるのだが……。

旅に必要な物は移動手段と追跡者、追跡者は要らなくない？

「ふっ！ふっ！！」

いや、朝から素振りって言うのは良いね！体を動かす事は本当に楽しい、できれば海に潜りたいけどここに海は無い………残念だなあ。

まあ良いか、すっきりしたし。

「戻るか」

そう言っただけでビジネスホテルに戻る、その時に昨日居た転生者に会った。体中にキスマークが付いていて死んだような目をしてこの世の終わりのような顔をしていた。

しかも服が所々破れていたり変な液体が付いていたけど………。

うん、何があつたんだろう。

でも僕のせいじゃあないよね、うん。

そんなことを考えていたら何時の間にか自分の部屋の前に来ていた、テンプレならここで着替えていると言う感じだけど………そんなことはあり得ない！！

「………ただいまー」

扉を開けると布団に入って何かを見ているフェイトが……。

「あーう、うんお帰りオウカ……………」

フェイトは見ていた物を隠しこつちを見た、明らかに動揺していた。

「何を見ていたの？」

そう言つてフェイトに近づく、それに反応してかフェイトが後ずさりをする。

「べ、別に何も」

「あ、胸の谷間が見える」

「嘘!？」

ふ、引つ掛かったな。

フェイトが右腕で胸を隠してる隙に左腕に持ってた物を見る。

「だ、騙した!!？」

「騙される方が悪い、とは言わないけど」

そう言いフェイトが見ていた物を見る、それは写真だった。  
写っていたのは十人程度の科学者……………って……………。

「これまだあつたんだ」



これは一番最初の頃の……僕が作られた一番最初の頃の科学者達だ。

「この頃はまだ酷い実験じゃあ無かったな……それに人間扱いだったし」

「……ああ……」

何時の間にか居たアギトも頷いていた、この頃はまだ楽しかった。

「……オウカ……この写真の人たちは……」

「ああ、僕を作った科学者達だよ……今じゃあ一人しか生きてないと思うけど」

「……昨日言っていたマナさんってこの人？」

フエイトが指差すのは一人の女性、綺麗な薄紫色の髪に橙色の瞳、目は鋭いが写真でも伝わる優しそうな雰囲気がある女性。

「……そうだよ、マナ・リルクライト……僕を作り出した研究の第一人者……そして僕のお姉さんだった人」

「……本当に優しかったな……私もこの人に助けられたんだ」

この時はあくまでも作る事だけだった、聖王を復元して……ちゃんとした大人に育てるという感じだった。

「うん、作られてから二年間は本当に楽しかった……あの事件が起きる前は」

「あの事件……？」

「……聞きたい？」

「……うん」

「そっか、じゃあ……次回に続く」

「何で!？」

この話はいままで言いたくない、同情されるのが嫌なのもあるけど……絶対に止められるから……。

本当ならずつとここに住んでいる予定だったけど……管理局預かりになったから関わらないといけないのか、僕がフェイトにスクリエッティの事を被害者とか言つてスクリエッティに恨みが……無くなつた？わけじゃあ無いかもしれないけど……まあ結局僕がフェイトに言う資格は無かったただけだ。

「……それよりも」

そう言つて買つてきたサンドイッチと牛乳を渡す。

「朝ご飯だよ」

朝食を食べ終わった後ビジネスホテルから出て街を歩いていた。

正確には歩いて隣町に移動するのだが……。

またあの転生者に出会った、だけでもう二度と使い物にならないだろう……。あのオカマと一緒に手をつないで歩いていたし、何か目が真っ白い粉を使ってる人みたいに逝っちゃった目で笑っていたからな……。

「えへ、エへへへ……」

顔を出来るだけ会わせない様に歩いてその場から100mくらい離れたらフェイトが口を開いた。

「何で昨日絶叫が聞こえたのか分かったよ」

いや、僕には分からない……。チート能力があるのに何で魔法を使えない一般人に負けたんだろう……。

デバイスが無くて能力が……。そういやニコポやナデポって男にも効くんだっけ？

効いたらいやだな……。つて……

「……フェイト、少し走るよ……」

「え？」

僕はフェイトの手を引っ張り人通りの多い道に行く……。

「一体どうした」

「管理局の白い悪魔、キング・オブ・デーモン事高町なのはに管理局の若狸事八神はやてが居た」

「……その二人の名称についてどうかと……」

「でも結構呼ばれてるよ、科学者達も言ってたし」

フェイトは僕が今言った言葉に苦笑いする。

「でもなんで人通りの多い道に？」

「理由は二つ、人通りの少ない道に行けば見つかる可能性が高いから」

人通りの少ない道って人が少ないから分かりやすいし、行き止まりがあったりする。

そうなると即戦闘勃発、僕はあの二人なら戦って勝てる自信があるけど……。

「それに管理局のオリーシュ、妬ましいぞこのハーレム野郎事神崎大輝も居たし……」

「……一応聞くけどその異名ってオウカが考えた事じゃないよね……」

「いや、マジで僕じゃない……フェイトにも異名が」

「聞きたくない」

「だよな」

うん、本当に酷いからね……残りのあだ名……。

「まあもう一つの理由は木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中って言うわけ」

まあこんだけ多ければ分からないだろう、小説や漫画なら分かるだろうけど……。

「でも少しくらいは変装した方が良いかなあ？」

僕はそう言つと急ぎ足でこの場から立ち去る。

その後見つかる事も無く何とかバレずに隣町に行く事が出来た。

「……疲れた……」

本当に疲れた、周囲を警戒しながらここに来るのには本当に神経使つたし何より遠かった。

他の移動手段があれば……。

「あ、これ良いな」

目に止まった物は自転車だった、何故か惹かれる……訳じゃないけど何故か欲しい。

それにデバイスの中に収納できるし……うん、これ買おう。

「すみませーん」

そう言つてからお店の中に入った。

「いやー、楽だね！！歩く必要ないし頑丈だし」

「かなり高いのを買ったからだと思うんだけど……………」

フェイトが僕の買ったもう一つの自転車に乗ってる。アギトは小さくなりフェイトの服に入っている。

そして何故か寝息まで聞こえる、アギトってあんな性格しているのによく寝るんだよなあ。

「さてと……………、ここから一番近いのが……………琵琶湖だったよな」

ポケットから取り出すのはミミズのように汚い字で書かれたメモ。

「じゃあ行くよ、フェイト」

「うん、分かった」

今思えばたった一日の出来事だった、たった一日で原作キャラに会い神崎大輝と戦って……………本当に何でこうなってしまったんだろう……………。

「あ、道逆だ」

「マ  
ジ  
ン  
?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0299ba/>

---

テンプレチート？夢のまた夢だよ

2012年1月8日19時54分発行